友愛

題字：鳩山威一郎

機関紙「友愛」
発行所
公益財団法人 友愛
〒112-0002
東京都文京区小石川
1-10-13 小石川文天ビル２階
TEL：03-5684-3188
FAX：03-5684-3186
E-Mail:you-i@yuai-love.com
http://yuai-love.com
編集人：羽中田元美
隔月１回　10日発行
会　費（4月〜3月）
個人／　3,000円以上
法人／10,000円以上

新任役員紙上ご挨拶

公益法人発足　十二名の理事・監事三名・評議員十二名勢揃い
担当業務も決まり、意欲的に活動開始

六月二十二日に開催された評議員会において、理事・監事・評議員が選任された。再任の役員の他、新たに四名の理事、一名の監事が就任し、公益財団法人として充実のスタートを切った。新たに就任した理事、監事にご執筆いただき、紙上でのご紹介をさせていただく。
写真もご本人からご提供いただいたものを掲載した。

理事就任にあたって

理事　中島政希

今から四十余年前、私は石田博英の秘書として政界に足を踏み入れました。石田は、鳩山派の闘将だった石橋湛山（首相、自民党第二代総裁）の最側近であり、石橋とともに吉田政権打倒・鳩山内閣樹立に献身した政治家でした。石田はよく、鳩山や吉田や石橋など戦後保守政党の創業者たちのことを語って聞かせてくれました。私が印象深く感じたのは、領袖と呼ばれたほどの人たちは皆、確固たる政治哲学を持って行動していたという事実でした。

石田博英自身も一九六、七〇年代の自民党の理論的指導者の一人でしたが、彼の政治思想は、鳩山一郎の「友愛」と石橋湛山の「小日本主義」に大きな影響を受けたものでした。石田は岸、池田、佐藤内閣で労働大臣を歴任し、また自民党全国組織委員長などを務める中で「自民党基本憲章」「自民党労働憲章」の成立に大きな役割を果たしました。石田が起草したこれらの憲章は六、七〇年代の自民党では準綱領的文書として尊重されましたが、その一節はこう述べています。

「人間は、その存在が尊いのであって、つねにそれ自体が目的であり、決して手段であってはならない。物と金の中に人間を見失うかもしれない今日の経済社会において、それ自体が目的である人格としての人間を確立し、尊重することこそ、政治の基本である。」

「人間は目的であって手段ではない」とは、友愛の理念を説いたクーデンホフ・カレルギーの『全体主義国家対人間』（鳩山一郎訳『自由と人生』）の有名な書き出しの言葉です。

かつての自民党の底流には、鳩山一郎が掲げた友愛の理念が脈々と受け継がれ、それが戦後の高度経済成長を支える精神にもなっていたのです。しかし冷戦終焉後、それが急速に失われていきました。また戦前の対外膨張政策（大日本主義）への反省も希薄になっていきました。平成八年に鳩山由紀夫氏が再び友愛を掲げて民主党を旗揚げしたのも、そうした時代環境への危機感からだったと思料します。

私もまた石田博英の弟子、また石橋湛山の孫弟子として、日本政治から「友愛」と「小日本主義」の理念が失われてはならないと確信し、政治活動に挺身してきました。そしてその理念の継承者として、東アジア共同体の創設を高唱する鳩山由紀夫氏に期待し、微力ながら行動を共にさせていただいて今日に至りました。

その鳩山由紀夫先生から、今般、伝統ある公益財団法人友愛の理事を拝命することになりましたことは、誠に光栄なことであり、石田博英を通じて微かに鳩山一郎先生につながるものとして、深い感慨を覚えております。

中島政希理事
ご自宅でのひとこま。粋な和服姿が良くお似合いです

私と友愛

理事　髙邑　勉

この度、公益財団法人友愛の理事を拝命致しました、髙邑勉と申します。二〇〇七年に北京大学国際関係学院を修了し、衆議院議員を務めさせて頂いていたご縁から、この度、財団の新規事業及び中国関連の活動のお手伝いをさせて頂くこととなりました。

私は、一昨年来、理事長の訪中に幾度となく同行させて頂き、友愛精神の発露を垣間見させて頂きました。昨年の春、中国植林プロジェクトに参加しました際には、陝西省や遼寧省の貧困地域に、理事長、川手顧問、事務局の皆さんたちが毎年足を運び、地元のボランティアの皆さんと一本一本丁寧に植林をしている姿を目の当たりにして、その活動の重みと意義を学ばせて頂きました。

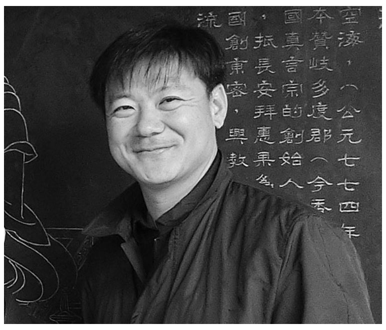
大幅に遅れて到着した会場では、理事長がご挨拶の冒頭で、壇の下に降りながら、列席の地元の皆さんに遅参をお詫びしておられたことが、強く印象に残っております。

またある時、陝西や遼寧出身の方に、植林をしている地名（麟遊県や朝陽市）をご紹介したところ、同じ省出身者でも行ったことがない所に、理事長自ら足を運び、植林を続けておられることに、異口同音に感嘆と畏敬の言葉を聞くこととなりました。二〇年近くにわたり継続してこられた友愛の皆さんのご尽力に、改めて敬意を表したいと思います。

以来、何とかしてこの偉業を受け継ぎ、継続出来ないものか、私なりに思いを巡らせ、年間二〇回を越える訪中の中で、考察を重ね、試行錯誤をして参りました。現時点では、どのような形になるかわかりませんが、関係者の方々とのご相談や調整を重ね、その精神を継承して参りたいと思います。

また、日中両国の青少年交流は今後益々密接に、多層化していくことが望まれると思います。財団としても、ご縁のあった中国側の指導者や団体との交流を重ね、文化、スポーツ、学術、芸術など、様々な分野において、交流を深める為に、微力を尽くして参る所存です。

日中の若者が胸襟を開いて語り合い、お互いを識ることから、本当の日中友好は紡ぎだされるものだと信じております。新参者ですが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



髙邑　勉理事
植林訪中の折り訪れた「青龍寺」にて
（空海が修行をした寺）

新たな時代

理事　山嵜偉広

五月一日より元号が平成から令和へと新しい時代が幕を開けました。平成の時代を振り返ると、日本経済の低迷、大規模な自然災害、インターネットの普及・携帯電話の進化等が思い返されます。しかし一番は戦争がなく、平和な時代を過ごせたことだと思います。令和の時代も戦争がなく、自立と共生の社会でて大人から子供まで幸せな時間を過ごせる時代になることを期待しております。

私、個人としては平成二〇年四月八日第一期鳩山友愛塾への入塾をきっかけに友愛と関わらせていただくこととなり、鳩山友愛塾卒塾より一〇年以上が経ちましたが未だに同期の方々とは交流を続けさせていただいております。

平成二三年三月には第十八次友愛訪中団第一期福建省アモイ市同安区生態緑化植林事業にも参加し、この植林活動が国際森林年認定植林活動であったことから貴重な体験をすることができました。また、現地の方々とも（白酒を酌み交わしながら）交流をさせていただきました。

昨年は、ミャンマー農業研修生の企業視察で、研修生の皆さまに私の地元銚子市にお越しいただき、地元商工会の職員として皆さまをご案内するなど、お手伝いする機会を得、友愛の活動、事業を実際に体験することが出来ました。

私にとっての友愛とは、様々な人たちと繋げていただいたプラットホームとなっております。

今回、歴史ある公益財団法人友愛の理事を拝命し、非常に責任を重く感じております。諸先輩方から比べればまだまだ力不足ですが、友愛の歴史や精神を学ばせていただきながら、新たな友愛へと進化させ、様々な人々が友愛というプ

山嵜偉広理事
アモイへの植林訪中で。博物館では皇帝の衣装を貸し出している

友愛時評

▼一月以来となる久々の時評執筆である。この間、友愛は公益財団法人となった。▼筆者と友愛のお付き合いは一六年前に遡る。クーデンホーフ＝カレルギー伯に関する国際シンポジウムでの報告を準備していた際、友愛の設立の経緯やク伯の訪日招待などを盛り込もうと思い、事務局に当時の資料が残っているか問い合わせたことがきっかけである。▼ク伯と日本の関係では、他に鹿島建設と創価学会が重要な役割を果たした。そこで両者にも資料状況を問い合わせたのだが、実際に関連資料を得るまでには相当難航した。それに比して、友愛は格段にオープンであった。軽井沢の友愛山荘の倉庫に眠っていた原資料の段ボール箱を自由に開けさせてくれたのである。▼「なるほど、友愛は「寛容」そのものだ」と感銘を受けつつ資料を読み解いていくと、友愛初期メンバーの社会改革にかける情熱に魅せられた。実際に数名のメンバーから話を聞く機会にも恵まれ、日本政治の舞台裏についても数多くの逸話や武勇伝などもろもろを伺い、別世界ではあるが私淑したい思いにもかられた。植林の訪中団にも何度か同行するようになり、一般財団法人化の際に評議員の末席に連なった。ほどなく、ク伯の著作のほとんどを翻訳した故深津栄一先生に代わり、この時評を担当するという光栄に浴した。▼公益財団法人化を契機に、新たな理事・評議員・幹事の方々を得て体制も一新された。新章に入った友愛がこれからどのような歩みをするのか——期待と不安が半ばするような思いである。（ヒゲ）

ラットホームを通じて広く繋がっていけるよう微力ながら全力で務めさせていただきたいと思います。

友愛の輪を世界に

理事　鳩山太郎

去る六月二十二日の定時評議員会において、新たに理事に就任いたしました、鳩山太郎と申します。元東京都議会議員で、現在は株式会社鳩山企画の代表取締役を務めております。

父である故・鳩山邦夫も、生前、友愛の理事（理事長・副理事長）を務めておりまして、改めて職責の重さを実感しているのと同時に、友愛の発展に微力を尽くす決心をしております。

さて、皆様にとって友愛とは、一体何でありましょうか。

日本における「友愛」の歴史は、決して長くはありません。一説には、英語の「ｆｒａｔｅｒｎｉｔｙ」を日本で初めて「友愛」と翻訳したのが、鳩山一郎だと言われております。そして、鳩山一郎は「友愛」を、「相互理解」「相互尊重」「相互扶助」と定義づけております。しかし、なぜ「友愛」なのでしょうか。「博愛」ではない理由は何なのでしょうか。

「博愛」と「友愛」の決定的な違いは、前者は全ての人を平等に愛するのに対し、後者は共に手を取り合える者と愛し合う、と言うことになると、私なりに理解しております。

では、手を取り合えない者は愛さないと言うことになるのかというと、無論、そうではありません。手を取り合えない者、差し出した手を拒否する者がいたら、相手を理解し、尊重し、扶助し、まず手を取り合える関係を構築していくことが、重要なのではないでしょうか。まず自分から愛を差し出し、上下の関係性ではなく、横並びの関係として、友として愛し、共に生きる。ここに「友愛」という言葉の神髄があるのではないかと考えております。

また、こぼれ話になりますが、フランス革命のスローガンは、「自由、平等、博愛」として一般的に広く知られておりますが、それはスローガンが訳された当時の日本に「友愛」という単語がなかったからで、本来の意味合いは「自由、平等、友愛」が近いのだそうです。

今、世界を見渡しましても、決して平和とは言えない状況です。頻発するテロの報道にも、さして驚かなくなってしまっています。そんな時世だからこそ、「友愛」の輪を世界に広げ、皆が手を取り合える平和な世界を構築して行くことが、公益財団法人友愛に課せられた重要な役割であると考えております。

家族で紋別に流氷を見に行った時の船上での一コマです。家内が撮ってくれました。しかし流氷は沖にあり、見ることが叶いませんでした。残念！

私は、理事に就任したばかりの若輩者ですが、今後、友愛に対する理解、そして友愛の普及のため、全身全霊精進して参ります。どうか、皆様のご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

監事就任にあたって

監事　海方　亨

このたび、公益財団法人友愛の監事に新たに就任致しました海方亨でございます。

ご縁が御座いましてこのような大役を仰せつかることとなりました。まことに微力ではございますが、会員の皆様をはじめ理事と監事の方々及び事務局の方々にご助言及びご協力を仰ぎ、職務にまい進して参りたい所存でございます。

私は現在茨城県にて、会計事務所を開業しておりますが、それ以前は東京都内の監査法人に勤務しておりました。

数年前に当該法人を辞して生まれ育った茨城県を拠点に多少なりとも地元に貢献できればとの思いにより開業し、現在に至っております。

監事の職務と権限については定款に具体的に記載されておりますが、様々な監査等を行う職務でございます。監事の職責を果たすためには具体的な実態、すなわち、公益財団法人友愛がどのような事業活動を行っているかを理解することが必要となると思います。紹介されている事業としては、友愛を理解する表彰事業、国際的人材を育てる国際交流事業及び友愛社会を目指す普及啓発活動でございます。いずれの事業も日本国内にとどまらず国際的に事業活動が展開されているようです。

私個人としましては、まずは友愛の精神を理解しなければならないと思っております。残念ながら、友愛とはどのようなものか、どのような考えなのかは具体的には理解しておりませんでした。

公益財団法人友愛のこの度の監事就任に際して友愛の扉を初めて開いた思いであります。現状はその扉を開けて一歩を踏み出したばかりで、勿論その先の核心にはまだまだたどり着いてはおりません。

自己の職務遂行のためのみならず、これから友愛を勉強するとともに身をもって感じることが出来ればとても有意義なこととなると考えております。

公益法人となって監事として就任したこともありますが、より一層の精進と共に職務を遂行させて頂く所存でございます。皆様方のご指導、ご鞭撻、そしてご協力の程お願い申し上げます。

海方　亨監事
友愛サロンにて。初めての理事会に出席の折り撮影

二〇一九年度国際交流事業　OJAB学生派遣

六名の学生が報告書・写真を提出

充実の十日間をそれぞれの言葉で

公益財団法人友愛／国際交流事業の一環であるOJAB（エヤップ）への学生派遣事業が実施され、六名が充実の十日間をオーストリアで過ごした。派遣員の学生から寄せられた感想、各人が撮影しキャプションを付けた写真をご紹介します。（順不同）今回は三名の女子学生が登場、男子学生の報告は十一月号に掲載します。（HPに全員の報告を掲載）

公益財団法人として初のOJAB派遣事業

理事　西川伸起

今年もOJAB（エヤップ）への派遣事業が成功裏に終了した。難民施設、老人ホーム、職業訓練校、日本大使館、外務省、国連（CTBTO）等を訪ねた派遣員の面々が、世界平和に、日本に、自分にそして友愛について思索を深め、次の行動へのエネルギー源となった様子については、各自のレポートに詳しい。

私からは、提出されたアンケートの記述欄にあった言葉を「　」にて引用しつつ、現地での行動以外の部分についてもご紹介させていただきたい。

公益財団となって初めてとなる今年度のエヤップ派遣事業は、従前にも増して広く開かれた募集に意を用いて行われた。友愛のHPに募集掲載するほか、国内40大学に募集ポスターの掲示を依頼した。その結果、「メンバーは…それぞれの多様な…考え方の幅が広がった。…尊敬できる五人だった。」『政治などの真面目な話もでき、本当に愛おしい時間だったと改めて感じます。』と相互に刺激しあう素晴らしい派遣メンバーが選ばれた。

派遣員は出発に先立ち、友愛サロン及び鳩山会館で二日間に亘り、友愛思想や友愛の歴史、エヤップについて学ぶ時間を持った。友愛サロンでは、川手正一郎最高顧問から「友愛とは」についてご自身の友愛活動六六年間をふりかえりつつ、友愛思想・友愛運動について、友愛国家、そして友愛の未来、さらには人間の解明についてまで、情熱をもって熱く講話いただいた。難しい概念の話にもかかわらず、平易簡明な語り口と、なによりご本人の熱意とお人柄に、派遣員も話に引き込まれ熱心にメモを取り、友愛について理解を深めた。小生からはカレルギー伯の紹介により始まったエヤップと友愛の今日までの関係等について説明させていただいた。

翌日には鳩山会館にお邪魔し、長田支配人より貴重な展示物等についてご説明を頂き友愛の歴史の重みを実感した。これらの時間の共有により派遣員も「私たちの中での共通点として、友愛に選ばれ、私たちは友愛を代表してウイーンにやってきたという意識があった。その感覚は二日間の研修で醸成できた…」との意識を持ったようだ。ご多忙の中、川手最高顧問、長田監事には大変お世話になり感謝申し上げる。

また、帰国した派遣生からは「現地で大学生とディスカッションする時間を設けたりすると面白いのでは…同世代との出会いは刺激的だと思いました」『オーストリアから学生を呼び…友好を深められるような企画もあれば良いな」など、友愛の事業そのもののような積極的な提案も頂いており、頼もしい限りである。ぜひ、その意欲を活かせる場を提供できればと思っている。

最後になるが、「座学により知識を得る内容と…実際の交流によって体感する内容のバランスがちょうどよい」『普通の旅行では行けないところを訪問』できる素晴らしいプログラムを「様々な準備をして」用意するとともに、「とても温かく迎えて頂け」『過労ではないかと心配』するほど献身的にご対応くださったエヤップの皆様には改めてお礼を申し上げたい。

友愛について、参加者が感動する講話を　川手正一郎最高顧問

エヤップについて他多岐にわたりレクチャー　西川伸起理事

レクチャー二日目、鳩山会館訪問。長田支配人より、鳩山家の歴史、会館の見所をたっぷりと

派遣員の他、希望の役員が参加。エヤップとの橋渡し等、通訳として活躍のミヒャエラさんも出席

真剣に耳を傾けメモを取って聞き入る派遣員の皆さん。緊張のなかにも、若い笑顔が絶えることはない

研修を終えて

東北大学
三年　阿部　真悠子

「難民ってどの国の人たち？　日本にもいるの？」研修への参加が決まるまでの私の認識は、実はこの程度でした。

「移民・難民」はどこか遠い国の問題であるように感じ、ニュースで見聞きするだけでその大枠を理解したような気になっていました。

しかし、そんな私だったからこそ、この研修への参加を通して得るものがあったのではないか。帰国した今、そう思っています。学び、考え、反省し、そして初めてのヨーロッパを自分なりに味わうことができた、そんな濃密な一〇日間でした。

オーストリア外務省で自国が直面する難民問題についてのプレゼンテーションを拝聴し、増え続ける難民への対応が国家の重大な課題として位置づけられ、複数の領域から多角的な支援がなされているということを知りました。決して彼らを排除せず、社会的包括の理念に立ち国の一員として受け入れようという考え方は当事国として理想であると感じると同時に、難民に対しての認識が浅い日本の課題についても考えさせられました。

難民の青年たちが暮らす施設で過ごした一日が、私にとって最も思い出深いです。出会う前はどんな人たちがいるのか緊張しましたが、実際に交流してみると、彼らが大人びていて、将来を前向きに見据えて過ごしていることに驚きました。

施設では、皆の意見を反映させるための投票箱や学校に通うことが難しい子のための学習空間が設けられるなど、彼らが社会に溶け込むために様々な支援がなされていることを知りました。施設の青年たちは皆仲が良く、私たちのことも明るく迎えてくれて、その温かさが印象深かったです。

自分よりも年下の子たちが辛い境遇を背負いながらも努力している姿を見て尊敬するとともに、難民に対する偏見が改められました。

学ぶことだけに限らず、自由時間にオーストリアの美しい街並み、文化、観光名所を満喫できたことも嬉しかったことの一つです。

また今回、学年も出身地も境遇も違う五人と一緒に過ごした一〇日間は、私にとって大きな刺激になりました。五人とも、社会の様々な問題に対して常に当事者意識を持っていて、会話をする中で今まで関心を向けてこなかった事柄に対しても意識するようになり、出発前よりも視野が広がった気がしました。

派遣員の五人との出会いを始め、普段の学生生活を送る中では決して経験することのできないような貴重な機会を与えてくださった、友愛の皆様、そして現地でお世話になったエヤップの関係者の皆様に感謝の意をお伝えしたいと思います。ありがとうございました。

カフェでケーキを選ぶ私（筆者）。どれも美味しそうで迷いました

音楽の都ウィーンでは、路地で楽器を演奏している人を多く見かけます。きれいな音色が街に響いていて心地よかったです

映画『サウンドオブミュージック』の舞台になった場所。実際に見て感激しました

三日目に訪れた外務省での一枚。外交史や難民問題の現状についてのお話をお聞きしました。建物がとても綺麗

世界遺産のシェーンブルン宮殿の前で。豪華な部屋の数々と大規模な美しい庭園を巡り、ハプスブルグ家の歴史に触れました

ブラチスラバの観光名所、青の教会。自由時間を使ってスロバキアまで行きました

「集団」と「個人」

慶應義塾大学大学院
修士一年　成田　葵

旅行から帰ってくると、「どんな国だった？」と友達や家族から聞かれると思います。

オーストリアへ行くのは、私にとって今回が二度目。一度目の時は、芸術の溢れる国だった、と話しました。しかし、今回はなんと形容したらよいのか、言葉に詰まってしまいました。

ウィーンの市内を歩くと、まるで中世にタイムスリップしたような町並み。公園、広場には音楽を奏でる人も多く、アコーディオンであったり、コップであったり様々な楽器を素敵な音色で奏でていました。

今回の旅行では、観光地も行きましたが、国連、老人ホーム、難民施設、オーストリア外務省等様々な場所を訪れ、「うわべ」だけではないウィーンを垣間見ることができました。

この渡航を通して感じたのは「オーストリアは個人を大事にしている」ということです。今回、非常に多くの方と話す機会を得ました。私は、訪問中にお会いした職員の方々に、「キャリア」について積極的に聞くように心がけていました。若いながらも色々な職業を経験されている方が多く、ケーキの販売員をしていた人等前職にもバラエティがあり、皆さん転職を前提に仕事をされていました。また、日本のような一斉に就活を行うシステムがないことには驚きました。

さらに、難民の施設に行った時には、難民を難民という集団としてみるのではなく、個人として、一人の少年として接していると強く感じました。難民施設で働くスタッフは、まるで両親のような存在で、彼ら難民のことを「boys」（こどもたち）と言っているのがとても印象的でした。

オーストリアは、移民・難民が占める割合が高いです。欧州難民危機において、人口比でみると、ドイツ、スウェーデンに次いで三番目に難民を受け入れています。地政学的にも東ヨーロッパと西ヨーロッパをつなぐ役割を果たすオーストリアですが、外務省訪問の際、移民を国力を担う重要なファクターの一要素として話されていたことを覚えています。

日本にいると、しばしば学歴、会社、年齢など、どのコミュニティに所属しているかでその人のパーソナリティを予測することが多いと思います。しかし、オーストリアは、コミュニティの流動性が高く、オーストリア外で育った人が多くきているため、コミュニティを基にパーソナリティを予測することは物理的にも難しい。だからこそ、より個人を大事にしている、個人を重視しなければいけない国なのだな、と感じました。

私は、移民・難民についての理解を深めたいという

国連にて（中央筆者）。ちなみに、こちらのパネルのモデルとなっている職員の方は、タンザニアと中国人スタッフだそうです

アフガニスタン出身の難民の少年が作ってくれた、地元のミルクティー。ふるさとを思い出すそうです。砂糖が沢山入っています

ザルツブルグの伝統的なお菓子『ザルツブルガーノッケル』。メレンゲでできているので、ふわふわしてとても美味しかったです

まるで中世にタイムスリップしたようなウィーン市内の町並み

難民の少年達とUNO。（中央は派遣員後藤さん）UNOは世界共通で、言葉が通じない少年達とも一緒に楽しんで、交流できました

職能訓練所（エヤップの運営するガラス工場）にて。ロシアから来た少年らとともに

思いから、オーストリア渡航を決めましたが、移民･難民の状況を学べることができただけでなく、オーストリアを深く知ることによって、日本を客観視できる貴重な機会になりました。この一〇日間での原体験を糧に、今後の大学院生活を通してアカデミックな面で移民･難民の知見を深めて行きたいと思います。さらに将来的には、俯瞰的な視野を持って社会課題を解決できるよう精進していきます

愛のある自分の居場所

早稲田大学
二年　森﨑　桃子

今回の派遣では本当に多くの経験をさせて頂きましたが、その中でも特に印象に残る、エヤップが運営する難民の男の子達の家について記そうと思います。

私達はウィーン郊外のグライフェンシュタインにある、難民の十五～十八歳の男の子が住む家を訪問しました。

職員さんの話によれば、オーストリアでは難民を国に統合して行く事に重きをおき、エヤップのこの施設もその一環を担っています。この家の目的は男の子達が、職員さんとの交流を通してオーストリアで暮らす上で必要となる価値観・マナーを学び、将来この国で生計を立てられるように育てる事です。

私達が訪問した際は、男の子達とバレーボールとＵＮＯ（カードゲーム）を一緒にしながら交流を深めました。男の子達といっても、彼らの中には年齢よりも大人びて見える子も多く、その苦難が顔に刻まれているように感じました。

彼らの多くはアフガニスタンからいくつもの国境を越えてオーストリアに辿り着き、祖国やその道のりの中で私達には想像できない苦しみも経験しています。

しかし意外な事に、私が交流する中で強く感じたのは可哀想などという感情ではなく、彼らのたくましさでした。バレーボールをしている時は、アウトかどうかの判断で必ず議論して、それぞれ情熱的に自分のチームが有利な事を主張し、ＵＮＯをしている時もチート（インチキ・ズル）するな、と言い合いながら熱心にゲームをしました。カッコつけたりせずに、目の前のゲームに夢中になって情熱をかける姿に、私は大きなパワーをもらいました。

勿論、私達が交流をする事ができたのは短い時間であった為、彼らの全てを知った訳ではありません。

体験した苦しみから立ち直れない子もいるという話も聞きましたし、必ずしも全員がオーストリアにおいて居場所を簡単に見つけられるわけではないのかもしれません。しかし、いつ自分の国に帰れるのかもわからない、家族と再会できるのかもわからない、という不安定な状況の中で、オーストリアにたどり着き、そこで必要な語学力や技術を身につける事ができ、そして何より、愛のある自分の居場所を得る事は本当に大切な事だと感じました。

グライフェンシュタインという自然豊かで美しい街の中で、これまでの困難、そして異国の全く違った文化･言語に向き合いながら、自分で生計を立てる為に学んでいる男の子たちがいるという事実自体に、理屈を超えた重みがあると、私は思います。

暮らしていく為に必要な居場所、愛、技術、そういったものを当たり前のようにそれらを享受してきた私は、その大切さを改めて感じました。直接自分で会いに行き、そこで時を共に過ごす事でしか得られない気づきを得た、難民、という一つの言葉では表わせない彼らの姿を伝える事で、多くの人にとって彼らの存在が身近になればいいな、と思います。

最後に、今回この派遣事業を素晴らしいものにする為にご尽力頂いた友愛の皆様、そして受け入れ先のエヤップの皆様に心から御礼申し上げます。

youtube（インターネット）で見た憧れの広場でガイドブックを読む（筆者）

最後の日に、ニキ（全行程を同行してくれたエヤップ職員）にプレゼントをあげました

行って来ます！　羽田空港にて（八月五日オーストリア航空便で出発・既に息の合った六人組！）

レズビアンのカップルの信号機。ジェンダーへの意識を感じます（ウィーン市内に数カ所設置）

エヤップのビンマーさん（中央）と。優しい笑顔で私たちを迎えてくださいました（阿部撮影）

「今の俺」十日間一緒だったニキの決めポーズ（ウィーン市内のみならずザルツブルグにも同行）

ザルツブルグにて。一番美味しいパンケーキ、カイザーシュマーレンをいただきました

ひとこま

今月は、学生達の写真も多く、見て楽しい九月号になりました。

ちょっと毛色を変えて、中国でのひとこまをご紹介します。

携帯（スマートフォン）での支払いは、日本でも徐々に増えつつあります が、まだまだ一般的ではありません。片や中国では、ほとんど全ての買い物、支払いがスマートフォンを利用して行われています。

タクシーを呼ぶ、支払うの全てが一連のアプリケーション機能で連携して可能なことは勿論、スーパーマーケット、コーヒーショップ、レストランでの支払い等々、数え上げたらきりがない程、スマートフォンで決済されています。

その浸透率がいかばかりかという実証が、この「ひとこま」の写真です。

上の二枚は、駅のロビーにあるマッサージチェアです。日本ですと、百円玉を何枚か投入が普通ですが、これもまたスマートフォンで利用できる仕組みです。左の肘掛けの写真を見てください。ＱＲコードが表示されており、こちらを読みとって支払いをするのです。浸透率証左のその二、は下の写真。北京駅の外で、冷やした飲み物を売っている出店です。良く見てください。こちらにもＱＲコードが表示されています。（矢印の位置）。本当にキャッシュレスが進んでいます。このシステム更に優れているのは、支払いの優良可が判定できる仕組みで、支払い不良な利用者は、店側がチェック出来て断れるそうです。信用第一！

駅のコンコースにずらっと並んだマッサージチェア。数十台がおかれている（右）支払い用ＱＲ（左）

暑い陽ざしの中、北京駅団体予約乗り場事務所の外で、二〇〇円程度の決済もＱＲで。ビックリです

編集後記

◆暑かった夏も過ぎ早九月。九月といえば名月、月見です。すず風の吹く夜、雲一つない空に冴え冴えと輝く月は、本当に美しいとため息がでます。『月見れば千々にものこそ哀しけれ我が身一つの秋にはあらねど』小倉百人一首にもある歌です。千二百年前に編纂された『古今和歌集』掲載とのことですから、人の思い、月を見て感慨に耽る、美しさに対する審美の基準など、千二百年間変わらないのでしょう。これは日本人の遺伝子がなせる業なのか、それとも、万国共通の感慨なのでしょうか…。と、思いに耽るのもここまで。公益財団法人としての事業推進に邁進します。（も）

公益財団法人　友愛

会員登録受付中

公益財団法人友愛は、皆さまのご支援・ご理解のもとで活動を続けております。会員登録（個人・法人）をしていただき、これからの友愛の発展にご協力ください。
＊申込みはHPからも　＊お問合せは事務局まで　電話03-5684-3188

今月号に同封のハガキをご利用ください!!